

発表要旨集

Abstracts

1. コンカーラッタナラック・プラポンサック (DCI Center for Buddhist Studies, Director)

laddhi という言葉は上座仏教特有の用語なのか？

初期仏教において仏教以外の異教の主張を指すとき、*ditthi* (見) という言葉が使用されていた。後代になっても *ditthi* はまだ使用されているが、新たな用語である *laddhi* という言葉が現れた。ただし、この *laddhi* は仏教以外の異教のみならず、仏教内の主張にも使用され、特に上座部以外の部派の主張にまで及んだ。そのため、本発表は *laddhi* という言葉の用例と語義を検討し、その特徴を探っていく。

2. 天野 信 (龍谷大学非常勤講師)

菩薩の世間観察について

釈尊の生涯を記載する仏伝テキストには、兜率天における菩薩の世間観察を伝えるものが複数存在する。この記事は、かつて兜率天に在住していた菩薩(釈尊)が、人間界に誕生する際の自身が生まれるべき時代、場所、家系等について観察を行うという内容となっている。なお上座部大寺派の文献では、この記事は、聖典(経・律)には存在せず、註釈書に伝承されている。本発表では、南北両伝承に存在するこの記事の成立過程を考察し、この記事が、仏伝および仏陀観の発達のうえで重要なものであることを指摘する。

3. 榎殿 伴子 (身延山大学国際日蓮学研究所研究員)

チベット埋蔵経典『マニ・カンブン』における初期仏教についての記述

『マニ・カンブン』は観音菩薩を主尊とし、観音菩薩の六字真言を説くチベット土着の「埋蔵経典」である。作者はこの典籍の中で観音菩薩の化身とされている古代チベット王ソンツェンガンポ (d. 650) に帰されているが、実際には、12世紀から13世紀に存命したこの経典の三人の「埋蔵経発見者」が作者であると考えられている。本発表では、同経典に表れる『ヴェッサンタラジャータカ』に類似の物語について解説する。

4. 清水 洋平 (大谷大学真宗総合研究所特別研究員)

舟橋 智哉 (大谷大学真宗総合研究所嘱託研究員)

タイの絵付き折本紙写本に引用される読誦経典の意味合い

タイの寺院が所蔵する大型の絵付き折本紙写本は、葬儀などの場で、読誦のために使用されてきた。そこに採り上げられる経典は、基本的に *Mahābuddhagūṇa* などのメインとなる経典と、*Vinaya*、*Sutta*、*Abhidhamma* 七論からの抜粋文で成り立っている。絵付き折本紙写本は、どのような経典が採り上げられているかの調査は進んできたが、各経典がなぜそこに用いられるかの意味合いは、研究があまりなされていない。本発表は、これら個々の経典が読誦経典として引用される意味について考察する。

5. 林 隆嗣 (こども教育宝仙大学教授)

上座部大寺派における「仏所説」(Buddhabhāsita) と「仏語」(Buddhavacana)

—失われた上座部文書『大法心』・『大界論』の位置づけをめぐって—

『論事』の正典性を問題視した Vītaṇḍavādin (難癖論者) が、代わりに『大法心』・『大界論』という別文書を論蔵に加えることを提案した、という『法集論註』の記述は古くから注目されてきた。本発表では、難癖論者が示した文書に焦点を当てて従来の上座部大寺派の聖典観・仏説観について再考を迫った近年の研究を出発点として、「ブッダによって説かれたもの」

(Buddhabhāsita、仏所説)・「ブッダの言葉」(Buddhavacana、仏語) とパーリ三蔵との関係を整理し、上座部大寺派における聖典概念を再考する。